

---

# クレイ = 大地の傀儡 =

長岡永久

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

クレイⅡ大地の傀儡Ⅱ

### 【Nコード】

N4843W

### 【作者名】

長岡永久

### 【あらすじ】

平穏な日常を過ごす流山武とその幼馴染姫野絢。考古学オタクの絢は突如著墓古墳から出土した『巨大土人形』に興奮する。その土人形に誘われ著墓古墳に来た武と絢は土人形の不思議な力によって弥生時代にタイムスリップしてしまう……

太古の昔の時代のヤマタ国を舞台に、不思議な巨大土人形『クレイ』と様々な人たち、時代が交差する、エセ和風ファンタジー。果たして、武は運命と闘うことができるのか！

## 事のはじまり 其の壱

「武くん！、武くん！」

やかましい声が俺の頭の上にたたきつけられる。

陽気な五月の日、陽気で幼気な幼馴染は、陽気に、のん気に寝ている俺を起こそうとしている。

彼女の呼応にウンともスンとも反応せず俺は机の上で体を伏せて寝ていた。

俺は眠いんだ……春眠ナントカカントカと言っじゃないか……昨日の練習で体の節々が痛いんだ……そして疲労も蓄積している……

俺は剣道部なんだ……帰宅部のお前と違って忙しいんだ……そこんとこわかってくれよ……

「面ええええん！！！」

突如、幼馴染、姫野<sup>ひめのあや</sup>絢の面打ちが炸裂する……

「痛ええええん！！！」

面打ちというのは下手な奴がやるほうが痛いもんで……

その上無防備の俺の頭上に炸裂させるとは……

傍若無人で破天荒な幼馴染、それが姫野<sup>ひめのあや</sup>絢……

黒いおかつぱ頭の髪、そして無垢で無邪気な童顔、そして小人で電車が乗れるくらいちっちゃな背の少女。それが姫野<sup>ひめのあや</sup>絢、俺の小っちゃいころからの幼馴染。

「あ、武くん。起きましたですか？」

開口一番がそれだった。実にすっとんきよな、人を刺しといて「これは何事ですか」と言ってるような……そんな妙な返答。

人の安眠を妨害しといてそんな返答をするとは、無神経というか、能天気というか……

「……な、なんなんだよ絢……」俺は寝ぼけながらそう答えた。

「ビッグニュースですよ武くん！！！！ビッグニュースです！！！！」

絢はいかにも嬉しそうに楽しそうに、手をパタパタさせ興奮を表現している。子供の様に、見るからに、見たままに子供の様なのだが……

「ビッグニュースってなんなんだ？」

「大事件ですよ武くん!!!」 『巨大土人形』が出土したんですよ!!!」

「『巨大土人形』？」

寝起きの俺には絢の言う『巨大土人形』がどういふものなのか想像できなかった。

だが、『出土』いう単語から絢の好きな考古学の話だということが推測できた。

「これです!!! 武くん!!!」

絢は手に持っていた新聞紙を武に見せた。

そこには……大きな……ずいぶん大きな……武人の埴輪の写真が載っていた。その埴輪は平坦な草地に仰向けに倒れていた……いや寝ていた。その埴輪の周りには何人かの水色の作業着を着た作業員がいた。

まるで合成写真のような画像。武人の埴輪を6倍ほどに拡大したように見えた。

画像の上にはその埴輪に負けないくらい大きく『巨大土人形出土』と書かれていた。その下には『埴輪の類か』と書かれていた。

「なんなんだこれは……」

「ビッグニュースですよ!!!」

本当にビッグニュースのようだ……ノギリクワガタが出土した時以来の大ニュース、いやそれ以上のビッグニュースのようだ。

そこに書かれてる記事を斜め読みしてわかったことは……先日、奈良県桜井市の箸墓古墳から大きな埴輪のような土人形が出土した。前代未聞、空前絶後の発見で考古学者も慌てふためいているようだ。しかしながら……この県は地面を掘ればいろんなものが出てくる

……それだから建物ひとつ立てるにも随分と時間がかかるのだが……

しかしながら大きい……その人形は……土製で、土の鎧を着て土の兜をかぶって、そして細い目で（くぼませて描かれている）細い口で、不気味に微笑む土人形……その大きさは全長6メートルほどと新聞に書かれていた。6メートル……人間3、4人分くらいか。土人形というより仏像という感じである。そんなものが埋まっていたとは……絢が騒ぐのも無理はない。

「箸墓古墳は卑弥呼の墓ではないかと言われていましたからねえ……こんなすごいものが出てくるとはわくわくしますねえ！」

卑弥呼の墓ねえ……卑弥呼ってのは確か邪馬台国の女王だったよなあ。女王様の墓ってことは金銀財宝とかザツクザツクなのかなあ。それにしても、絢の考古学に対する執拗でオタクな精神にはあきれるしかない……

こんな年で考古学に興味を持つとは……一応17歳の女子高生なんだからもっと女の子らしいものに興味を持たないものなのだろうか。

「ん？どうしたんですか武くん？」

「いや……お前にも女の子らしい趣味とかないのかなとか思って」

「女の子らしい……」

すると絢はポケットから角の生えた人形を取り出す。

「せ〇とくん人形です！！！」

「……………」

やはりあきれるしかない……この頭のネジが外れた天然人間は……確かにゆるいキャラというのは女子に人気かもしれないが……その絢の持っている人形においては絢以外で本気でかわいいと思っっている人間がいるかどうか怪しすぎる。怪しい人間姫野絢、怪しいのあやは姫野絢のあや……なんという言葉のあや……

絢は何やら新聞の土人形についてあーだこーだ言っていた。絢の言っていることはよくわからない単語やよくわからない人の名前が出てきたりしてよくわからない。俺の頭のスペックじゃ理解できない。

教室の時計に目をやる。時間は4時過ぎ。

「絢、もう俺部活いかねえと」

「あ、もうこんな時間ですか」絢は教室の隅の時計に目をやる。

「お前は考古学の話になると時間を忘れて話すからなあ」

「武くんは太古のロマンってやつを感じないんですか？」

「あいにく俺は過去を振り返らない性質たちなんでね。俺は目先の部活をがんばらねえといけねえからなあ」俺は席を立ち教室の入り口へ歩み寄る。

「部活頑張ってくださいです武くん」

「ああ、行ってくる」腕を振る絢に一瞥し教室を出た。

体育館横の道場への道を通るコンクリートの廊下を、重い防具と、細い竹刀を担いで歩いていった。

すると向こうから顔を見知った一人の女子が歩いてきた。

「あ、武」ショートヘアの眼鏡をかけた女子が声をかけた。

「お、久那」俺は返答する。

こいつは俺の小学校からの幼馴染乙女山久那おとめやまくな。清楚で上品な雰囲気を持つ少女、と言われている。おれは案外普通な奴だと思っんだが……

久那はいわゆる『お嬢様』というやつだ。決して『お嬢様キアラ』というわけではないが……いいところの出らしい。『らしい』というのは……本人がその実態を教えてくれないのだ。家は豪華絢爛、そして純和風の造り。どこかの大会社の娘か、はたまたヤクザの娘か……10年以上の付き合いの俺たちにも話してくれない。

久那との出会いは、確か俺が絢と男友達の剛実たけみと遊んでいたときに一緒に混ざって遊んだのがきっかけだった。その当時は久那と別クラスだったため一緒に遊ぶまでは久那の隣人の剛実以外俺たちは久那のことを知らなかった。そして家に呼ばれるまで『お嬢様』ということも知らなかった。たしか久那の家に行ったとき絢は石像のごとく固まっていたなあ。

「武、これから部活なの？」

「ああ、これからなあ」

すると久那はとたんに溜息をついた。何かあったのだろうか？

「武、今日剛実に出会わなかった？」

「剛実イ？」

剛実とはさつきの話に出てきた俺の男友達のことである。ちなみにこいつも幼馴染というやつである。

剛実のことを一言で説明すると……とにかく『馬鹿』である。

体力馬鹿、剣道馬鹿、精神馬鹿、熱血馬鹿、とことんバカ、そして馬鹿正直でなんやかんやでいいやつである。

ガタイのデカい、短髪の男。それが剛実、本名藤ノ木剛実<sup>ふじのきたけみ</sup>。強靱な肉体と、強靱な精神力を有しており、毎日剣道の修行にはげみ、時には山にこもって修行することもある。そんなまっすぐな男。だが馬鹿である……

「剛実……」俺は刹那だけ考える。

「そういえば今日休んでたな」そういえばそうだった……でもあいつが休むとは……あいつは確か病気に一度もかかったことがないって自慢していたなあ。真冬の山で滝行<sup>たきぎょう</sup>をするぐらいの男だからなあ……

それじゃあなんで休んでるんだろうか……

「武……」久那が呆れた顔で話し始める。

「実は今朝、剛実の家に行ったら、剛実のお母さんが『剛実なら修行の旅に出ました』って言ったのよ……」

「……」

修行の旅……まさかそのために休んだのか……学校をダルいという理由で休むような輩がいるこの時代、修行のために休むとは……まあ推薦入学でこの学校を入学してきた剛実にとって学校の授業とというのは、お坊さんが読むお経のようなものなのだろう。

かくいう俺もここに推薦入学で入ってきたんだが……

「修行の旅……あいつどこに行っただよ……」

「剛実のお母さんいわく、『吉野のほうへ行ってきます』って書置

きがあつたそうなのよ」

「吉野ねえ……大峰山にでも登っているのかねえ」

大峰山とは奈良県吉野郡天川村にある修験者の修行場である。何年前かに世界遺産になってからああたりもばかに有名になったものだ。ごつごつとした岩山を登ったり、断崖絶壁から谷底をのぞいたり随分と過酷な修行を行う。いわゆる精神修行というやつなのだろうか。どちらにせよ今の世の中高校生でそんな修行を進んでやるような奴はあいつぐらいだろうと思う。

「まあ、いつものことだからなあ……」剛実が修行の旅に出かけるのは珍しい話じゃない。よくある話だ。良くも悪くもよくある話だ。突然修行に出て突然帰ってくる。あいつは真面目なんだか馬鹿なんだか時々わからなくなるものだ。長年付き合ってる俺でさえも理解不能で予測不能だ。

「はあ、心配する身にもなつて欲しいわ……」久那が溜息をついて言った。

昔から久那はよく剛実の面倒を見ている。隣人だからなのか幼馴染だからなのかどちらにせよ今の今まで馬鹿の化身の剛実の面倒をよく見ている。よく飽きもせず。久那は見かけによらず面倒見のいいやつなのである。

「まあ、書置きに『三日後に帰ってきます』って書いてあつたって言つてたから三日後には帰ってくると思っただけどねえ」

「三日後ねえ」三日後にはたくましくなつた剛実が姿を現すのだろうか。

「まあ、俺も剛実に負けないように部活頑張らねえと」俺は方に背負つた防具を背負いなおす。

「あ、武部活だつたんだわね」

「ああ、これから行つてくるんだ」

「部活頑張つてね武」

「ああ」俺は久那に返事をしその場を後にした。

道場に着く。

つやのある茶色い板張りの床、木で組まれた天井。正面に神棚。そこに、一人の先輩がいた。

「お、武。来てたのか」先輩振り向いた。

「先輩、こんにちわツス」紺の胴着と袴を着た背の高い先輩に挨拶をする。

「武、今日は剛実は来てないのか」

「剛実なら今日学校休んでたんツスよ」

「休んでた？あいつがか？」

「なんだか修行に行くとか何とかで休んでるみたいですよ」

「修行ねえ。ははは」先輩は少し呆れたような笑いをした。

俺と剛実はこの剣道部に所属している。長年剣道をやり続けているので今でも剣道を続けている。

剛実の『剣道馬鹿』という名称は伊達ではない。なんとあいつは毎年全国に行くほどの剣道の達人である。まあ、あれだけ熱心に練習したり修行したりしていればおのずと成果は出るだろう。

剣道一段を習得していて、全国に出ている、あいつはかなりすごい奴である。あいつのする剣道はなんだか格が違う……雑念がないというか、まっすぐというか、あんなきれいな面打ちをするのは藤ノ木剛実以外では前代未聞である。

対する俺は……自慢ではないが県大会に行くぐらいの実力はある。だが……剛実の足元にも及ばない……昔は剛実より俺のほうが強かったのだが、いつの間にか抜かれてしまった。まるでうさぎとかめのようにうさぎの俺をかめのように地道に進む剛実が確実に抜かしていった。その差は開いていくばかり。あいつは確かに剣道に関してだけはインシュタイン並に『天才』である。天性の天才。しかし例えあいつが天才だったとしても負けたくはなかった。幼馴染だから、悪友だから、ライバルだから。でも勝てない。まるで雲の上にいる存在……そんな高いところまで行ってしまった。今じゃもう、まぐれで剛実に一本取ることさえもままならなくなってしまった。





## 事のはじまり 其の貳

俺の名前は流山武<sup>ながれやまたける こうりやま</sup>。小売山高校に通う高校2年生、現在17歳。さつきも話したように学校では剣道部に所属している。剣道は剛実とともに小学校からずっと続けていて、そして現在も続けている。友人は……特に親しいのは剛実<sup>たけみ</sup>と絢<sup>あや</sup>と久那<sup>くな</sup>ぐらいか。3人と幼馴染、腐れ縁といふかなんというか、それにしても小学校からずっと4人全員同じ学校にいるというのは運命を感じる……しかも今現在俺たちが通ってる高校は結構この辺りでは有名で、レベルの高い高校……勉強のできるお嬢様の久那、歴史の成績だけ異様に高い絢を除く俺と剛実の男二人はどう間違えても、何かの間違いがないかぎり入学できるような学校ではない。偶然にも剣道に力を入れている高校だったため、剣道に力を入れている俺たち二人が推薦入学で入れたわけなのだが……

どちらにしても、幼馴染が同じ学校にいるというのはありがたいことである。心置きなく接することができる幼馴染。遊んだり、馬鹿やったり、喧嘩したり、笑いあったり……そんな関係がいつまでも続けばいいなと柄にもなく思ってしまった。

ガタンゴトン……ガタンゴトン……  
電車が揺れる、程よく揺れる、心地よく揺れる。まるでゆりかごのように。

部活帰りの俺には睡魔という悪魔が肩にどっしりと載っかっていた。

うつろな頭、うつろな視界、うつろな世界……  
そのまま夢の世界へと行く……

俺は夢を見ている。ここは神社の境内。  
少女が泣いている。

おかつば頭の少女がエンエンと、延々と泣いているのが見えた。

「ミイラ女ア！！！！ ミイラ女ア！！！！」

その少女に向かって、三人の少年が汚い言葉を浴びせていた……  
「う……う……う……」

その少女は涙目になっていた、左目から涙が……一つ、二つ。そして右目からは……何も流れない、いや、流すことができないのだ……

そこには、少女の右目には眼帯があつたのだ。

そして少女の頭に白い包帯がぐるぐると巻いてあつた。

少女は怪我をしていたのだ……目を、頭を、そして心を……

天涯孤独なつた少女、悲劇の少女、悲劇のヒロイン。

少女のその風貌は、幼い子供たちにとっては異形のものでしかなく、知ろうとしない、もしくは理解することができないのだろうか……

だから傷つける、安直に、直情的に。

「ミイラ女が泣いてるぞお！」

「ミイラ女のタタリだぞお！」

その罵詈雑言に彼女はうずくまっていた。背の小さな少女にはそれしかできなかつた。そして彼女は願う……こんな苦しいのは嫌だ、誰か助けて……と。

その刹那、小さな少年の影が映った。

「面ええええええええん！！！！」

パコン、パコン、パコン。その少年は罵詈雑言を吐いていた子供たちに面打ちをクリーンヒットさせる。

「痛ええええええええええ！！！！」

少年の面打ちを受けた子供たちはその場を去っていった。少女から去っていった。一目散に去っていった。

「だいじょうぶか、あや」昔の俺、少年、流山武は少女に手を差し伸べた。

「た、たけるくん……」申し訳なさそうな顔をする少女、姫野絢。少女は両手で涙を拭いていた。

「そ、その……ありがとう……」と少女は言った。少女の言動は弱弱しかった……それもそのはずだ……もう少女が頼れるのはこの少年しかいなかった。

昔の俺はそんなことを悟ったのか、小さいながら、子供ながら、大きく胸を張る。

「こんなことで謝られちゃ困る」と少年は言った。

「俺は恩返しをしなくちゃならない……」

ガタンゴトン……ガタンゴトン……

俺は目を覚ました。ここは電車の中、俺は夢を見ていたそうだが……あの時の夢か……あの頃交通事故で大けがをした絢は、頭に包帯と目に眼帯をしていて、その風体のせいでいじめられていたんだっただなあ……

今はもうそんな傷は残っていないからそんなことはないのだが……あの頃はよく絢のことをかばっていた。かばわなければならなかった。絢を守らなければいけない使命があった。

そんな昔の出来事に灌漑に老けていると、駅に着いた。

ゲコゲコゲコ……

田舎の夜が静かなのは迷信である。このゲコゲコとなる緑の生物、カエル。こうして帰宅しながら聞くのには風情があつていいものだが、夜中に大合唱をやられるといやなものである。まあ、慣れればどうってことないんだが……

ここは田舎、といつてもド田舎ではなく、都会、というほどには栄えていなく……まあ、いわゆる郊外つとこなのか。ここが俺のふるさと、ふるさと古山。俺と剛実と絢と久那の家はこの町の同じ通りにある。絢と久那はもう家に帰っているのだろうか……もうこんな時間ならとつくに帰つてると思うが、俺はそんなことを考えながら帰路を歩いていく……と、

ドン！

みぞおちのあたりに、何かが、いや誰かがぶつかつた。一瞬ぶつかつてきたのはどこかの子供だろうかと思つたが、正面を見るとそこには地面に仰向けに倒れている絢の姿があつた。

「あ、絢！」

「く、くふう」

絢は頭を押さえながらのっそりと起き上つた。そして絢はくふうとため息をつく。

「あ、武くんです！」

絢は案外立ち直りが早い、昔は泣き虫つ子だったが今ではもうその面影は見えない。彼女の片手にはビニールの買い物袋があり、適当な野菜と、適当な肉類と適当な調味料等が入っていた。

そして、彼女は巫女装束を着ていた……

「なんでそんな恰好なんだ……」俺はまずそこから突っ込んだ。

「だつて着替えるのめんどくさかつたからです！！！」

横着なやつめ……なんで巫女装束で出歩こうとするんだよ……

絢は巫女なのである。この古山の古山神社の巫女なのだそうだ。

幼いころに両親を亡くした絢は実質一人でその古町神社を切り盛りしている。まあ、忙しいときとか、お祭りのときとかはお手伝いさんを呼んでるそうだし、そんなに大きな神社でもないのでもそこまで大変ということではないらしい。しかし、絢には親がない。しかも身寄りもない。天涯孤独というやつだ。まるで何者かに呪われたかのように、絢一人だけが取り残された。その絢でさえ交通事故で大怪我をしたというのに……

しかし当の本人は天真爛漫なやつである。そんなバックグラウンドを考えさせないような、想像させないような、明るく元気な奴である。

「実はお買い物に行つててですねえ……お魚が安かつたんですよ」

どうやら絢は予測通り買い物に行つていたそうだ。小さな体ながら頑張るやつだなあと思つた。

「で、武くんはなんでこんなところにいるですか？」

「今帰りなんだよ」と俺は言った。

「奇遇ですねえ武くん。私も帰ってる場所だったんです」と絢は言った。

「ところで武くん、今晩は暇ですか？」

「今晚って……」今は早く家に帰って飯を食って風呂に入っぐっすり眠りたいところなんだが。

「突然ですが武くん、ちょっと家に寄ってってくれませんか？」

「家イ？」

「はい、ちょっと手伝ってほしいことがありますですねえ……」

## 事のはじまり 其の参

ここは古山神社<sup>ふるやまじんじゃ</sup>、の隣にある姫野<sup>ひめのあや</sup>絢の自宅。ここには何度も来たことがある。最近は忙しくてあんまり来ていないなあ……

しかしながら本当に誰もいないところ……まあ、一人暮らしというのはこんなものなのだろうけども。しかし、両親が二人とも顕在している俺にとっては一瞬、さみしいところに見えてしまった。

しかし、しばらくするとそんな感じはしなくなった。明かりをつけて、テレビをつけてればあまりさみしい感じはしなくなった……文明の利器とは偉大である。

絢は台所でせっせと料理をしていた……どうやら俺は今晚、絢の家で晩飯を食うことになるらしい。こちらに拒否権はない。これは決定事項である。あいつは一度決めたことは決して曲げないやつだ。やると言ったらとことんやる、やらないと言ったらとことんやらない。随分とめんどくさい奴である。

まあ、別に絢の家に厄介になるのは構わない。むしろうまい晩飯を食わせてくれるんだしいいことである……が、あいつが気前がいいときはどうも嫌な予感がする。何か裏があるというか……何か企んでるといふか……

絢は小さい手で器用に、そしててきぱきと野菜を切っていた。まるで料理番組を見ているかのような包丁さばき、その包丁さばきでマグロー一匹は軽く捌けるだろうと思えた。

ジュージューと魚の焼ける音がする、そしてジャージャーと野菜を炒める音、そして食欲をそそるにおいが、部屋中に漂う……

炊飯器が電子音のメロディを流す。ご飯が炊けたようだ。

俺は炊飯器を開けて、お茶碗を取出し、しゃもじで二人分のご飯を注いでおいた。

「あ、武くん、ありがとうございます」

ご飯を注いでいる俺を見て絢が言った。絢の料理はもう終盤に差

し掛かっていた。もうすぐごはんができる頃だ。

「それではいただきますです!!!!」

「いただきます」

居間にあるテーブルに向かい合わせて座る俺と絢。その姿はさながら……両親を亡くした兄弟みたいなシチュエーションに見えてしまい、吹き出してしまいそうになった。

「どうですか、武くん、お味のほうは」絢は満面の笑みを浮かべていた。

「おかわりッ!」

「早ッ!!!! ですよ!!!!」

そんなくだらない受け答えをする俺と絢、何はともあれ俺たちは幸せだった。絢とこうして食事しているとなんだか幸せな気持ちになれる。まるで昔に戻ったかのように。

俺と絢はテレビを見ながら、くだらない会話をしながら、ぺちゃくちゃぺちゃくちゃと箸を進めていた。こういうことを言うのもなんだが、両親がいないと、子供だけだと随分と開放感がある。両親とじゃもうこんな風には食事はできない。絢に関してはもう一生できないのだが……

「正解は2番です!!!!」絢はテレビのクイズ番組を見ながらそう言った。

「いや、1番だろう」俺はそう答えた。

そのクイズ番組の問題は『この人物は誰でしょう』と歴史上の人物の肖像画出ていて、その下に三つの名前が番号順に書かれてあつて、『?小野妹子?聖徳太子?推古天皇』と書かれてあつた。でも、どう見てもモニターに映っている肖像画は小野妹子である。聖徳太子はもつとひげが長かつたはずだ……たぶん。

「武くんの目は節穴なんですか?これのどこが小野妹子なんですか?」

「何言つてんだよ、これはどう見ても小野妹子ちゃんだ! ほら見

る！ あの眼はまさしく『隋に行ってきましたよ』って目だ  
「どんな目なんですかそれは」

……正解は……2番だった……自信があったのに……  
やはり歴史の問題で絢と競うのは無謀だったということか……こ  
いつは考古学オタクなだけに歴史に強い、めっちゃくちゃ強い。

まあ、そんなこんなで晩飯の時間は終わる……楽しい時間はあっ  
という間に過ぎていく、今は午後10時、そろそろ帰らないと……  
でも……そういえばたしか……絢は『話がある』っていつてたよ  
なあ……話ってなんなんだ？ 晩飯を食っててそのことを忘れていた  
なあ……

「ところでですねえ……武くん」突然絢が話し出した。

「今日の話のことなんですが……」

「今日の話……」今日の話と言ったら……たしか……『巨大土人形』  
のことか？

あの全長6メートルの武人の、埴輪のようなもの……たしかに、  
あれは今日の出来事の中で剛実の修行をしのぐインパクトを持つト  
ピックスだったが……

「『巨大土人形』のことです……！」と、絢はテレビに向かって指  
をさす。その指の先には、ニュース番組の映像。画面上部に大きく  
『巨大土人形出土』と書かれたニュースが流れていた。いやはや……  
……ずいぶんと大事になっているもんだなあ……奈良県にまた新しい  
観光スポットでもできるんじゃないのか……

「あの大きい埴輪みたいなののことか？」

「はい、はしかごふん 箸墓古墳の巨大土人形のことです……！」

「それで……その人形がどうしたっていうんだ？」

「武くん、今からあれを見に行きませんか？」

「へ？」

絢が突拍子もないことを言った。しかしこいつは突拍子のないこ  
とを言うことが大好きなのである。そして突拍子のないことをする  
ことも大好きなのである。

「み、見に行くって……あれをか……？」

「はいです！！！」

箸墓古墳は古山の隣にある市にある古墳で、ここから自転車で行くと思えば行けるぐらいのところにある。しかし、こんな夜に、突然行くというのか……

思い立ったが吉日ということわざもあるが……しかしあまりにも突飛すぎる。突然修行の旅に出た剛実並に突飛である。

「あのなあ……絢……」俺は呆れたように話す。

「なんで今行くこうとするんだ……もっと昼間とか、休みの日とか、行く時間はあるだろう……」

「私は今行きたいんです！！！」

まるで子供のダダだ。その絢の無邪気な表情は、時々俺を困らせ、そして被害をこうむらせる。

「武くん、この私の中から湧き水のごとく溢れ出す探究心は誰の手にも止められないんですよ！！！止めようとするなら、そいつの息の根を止めてやるです！！！」

絢は今日はいつも以上に元気である。あの土人形の話をして以来ずっとエンジンかかりっ放しである。エンジン全開の絢は誰にも止められない。猪突猛進、わき目も振らず目的に向かって突き進む。

しかし……その絢の進行を幼馴染として止めなければならぬ。例えば誰にもとめられない暴走トラックであっても、身を挺して止めなければ……

俺は……こいつを守らなければならぬんだから……

「……ん？どうしたんですか武くん？」

「絢……時計を見てみる……」

絢は言われた通り時計に目をやる。時間は10時ちょっと前。こんな時間に出歩くのはあまりよろしくないことだ。しかも田舎の夜となると……自分の周りのものを認識できないくらい真っ暗になってしまう……そんな状態で出かけるのは、随分と面倒で、厄介なことである。

「うーん……そうですか……たしかに武くんももうおうちに帰らないといけないですし……もう暗いですし……それじゃあ私だけで行きましようですかね……」

「ちょ、ちょっと待て!!!」俺は絢を引き留める。

「どうしたんですか武くん」

「い、いやぁ……女が夜中に出歩くのは……危ねえだろうが……」

自分で言っておいて何とも恥ずかしい時代錯誤なセリフ……しかし、俺は条件反射的にそれを言ってしまった。

「ふふふふ……武くんってホント武士ですねえ」

武士というより……俺は時代に取り残された異端児だと思う……小学校のころから毎日毎日剛実と共に剣道に明け暮れていたせいなのか……こんな性格になってしまった……

「でも今の世の中、そんな男の子はモテませんですよ」

「うるせえ……とにかく……こんな夜中に出歩くななんて御法度だからなあ!!!お母さんが許さないぞ!!!」突然俺は絢のお母さんになって説教してやった。

「ふうん……それじゃあ武くん付いてきてくれますですか？」

「へ？」俺は疑問する。

「武くんが一緒なら怖いものなしですよ!!!」

「……」

信頼されているというのは、ときに嬉しく、ときに苦しいものである。このまま絢に言いくるめられてあの土人形を見に行くことになるのは癪である。なんとかしなければ……

「駄目だ、付いていかねえ……俺は部活帰りで疲れてるんだよ……もう自転車もろくに漕げん……早く家に帰って風呂に入って寝たいんだよ……」

「それじゃあ私だけで行ってきますですよ!!!」

「それは駄目だ!!!」

「それじゃあ武くん、付いてきてくれますですか？」

「……」

堂々巡り、無限ループ。もう屈するしかない、屈してしまっただ……

俺は一生こいつのやることに振り回されるのかもしれない……いくらあいつを守らないといけないからと言ってそれだけは嫌だ……俺の一生は俺の一生だ。絢のせいで振り回されてたまるか……

そんな俺をしり目に、出かける準備をする絢。俺はまだ了承をしていないというのに……しかしあいつが行くとなったらどうしようもない、俺はあいつの奴隷なのか……

「準備できました！！！」絢はなぜか背中に赤いリュックを背負っていた。まるでこれから大冒険に行くかのような……あのリュックには何が詰まってるんだろうか……

俺は立ち上がり、絢と共に姫野家の玄関へと向かう。そして外に出て、倉庫にあった古いママチャリを取り出す。随分と古いながらあまりガタはきていない。その自転車のサドルに俺はまたがる。そして絢は後ろの座席に乗る。二人乗りというやつだ。

「それでは出発です！！！」絢の声が静かな夜の中で響いていく。

## タイムスリップ

黒いコンクリート道路の両脇に田んぼ、もしくはこの町の特産品の柿の木が並ぶ田舎道を、軽い荷物、姫野絢を乗せて自転車をこぐ。確かに辺りは真っ暗だった。あたりには何も、何者も見えない。静かで、寂しい夜の道。そこには二人の非行少年少女がいるだけだった。

夜空に浮かぶ月はなぜか今日に限って新月だった。その情景は何か不吉なことが起きる前兆のように思えてしまった。何か悪いことが起きなければいいのだが……なんだか先が思いやられる……

そんな夜の情景を後ろにいる少女、姫野絢は、長い黒髪をなびかせぼんやりとみていた。

「今日はいいい夜です」

絢にはこの情景がいにいい夜に見えるらしい。俺には不吉に見えるこの夜は、絢にとってはいい夜らしい。もっとも絢は「巨大土人形」が見れるから、その嬉しさでこの夜がいにいい夜に見えたのかもしれない。対する俺は……絢に無理やり使役されてる俺にとっては、この夜は退屈で陰鬱なものでしかない。そう思うと漕いでいるペダルが途端に重くなつたように感じた。

長い道、長い道のり、言うほど遠い道ではないが、疲労困憊ひろいこんぱいしている俺にとってはこの道は少々きついものだった。後ろでのん気にはしゃいでいる絢を見るとなんかムカついてくる……まるで俺は馬車につながれた馬のようだ……

はあ……17にもなって俺は何をやっているんだろう……そして後ろにいるあいつは何を考えているんだろう……あいつも一応人間だ……一応何かは考えてるかもしれない。将来のこと、未来のこと……

とりあえず今は、ペダルをこがなければならぬ……前へ進まなければならぬ。

とりあえず進まなければならぬ、たとえ進度が微小なものであっても。道は前にしかないから、今の俺には……それしか思いつかないから……

「見えてきたです!!!」

数百メートル先に小山のような盛り上がった地形が見えてきた。古墳、太古の人々が作り上げた王の墓。大層に言えば日本版ピラミッド。しかしその日本型ピラミッドは本物のピラミッドとは姿かたちが違う代物。一見すると山に見えてしまふ、ただの盛り上がった地形。それが古墳。

これのどこにロマンというものを感じるのか……俺には理解できない……

目的の箸墓古墳の前まで自転車を進め、その道端に自転車を置く。後ろのお荷物、姫野絢は後部座席からひよいと降り、満面の笑みで古墳へと向かう。自転車を置いた俺はその後をついていく。

「ここが箸墓古墳ですかあ」

絢は目を輝かせながらそう言った。周りは住宅街だが、今のこの時間、この辺りには誰も人がいなかった。古墳のほうにも、作業員やら学者やらがいるようには見えなかった。誰もいない、まるで俺と絢がこの地に取り残されたかのように静かだった。

「くふうく、誰もいなさそうですねえ」絢があたりをきよるきよるしながらそう言った。

すると……絢は目の前にあった古墳を囲んでいた柵を、小猿のごとく軽々と上り、そして柵の向こうへと行った……柵の向こうには絢の背中姿があった。

「お、おい絢!!!」

絢の突然の突飛な行動に驚いていた、いや、半分驚いて、半分呆れた……

「こいつには自制心というものが無いのか……」

「あ、絢お前何してるんだよ!!!」

「何してるって、今から見に行くんですよ」素っ頓きように答え

る絢。

「み、見に行くって何を……」

「巨大土人形です！……」

「そうだとは思ったが、そうだとは言ってほしくなかった……目的のためには手段を選ばない……お前は悪の組織の一員か……」

「おい、絢。お前今何をしようとしてるかわかっているのか？無許可で勝手に古墳に入って巨大土人形を拝む……それって墓荒らしじゃねえかよ……」

「墓荒らしじゃありませんです！！いいですか武くん、荒らさなければ墓荒らしじゃないんです。私は『巨大土人形』を『見たい』だけなんです。荒らしたり、何かを取ったりしようとか1ナノも思っ  
つてませんよ！！！！」

「なんだよその屁理屈……まるで悪人の戯言だ……」

「こいつにはもう着いていけない……着いて行ったら刑務所まで着いて行くことになるかもしれない……」

「そんな俺をしり目に、古墳のほうへ行く絢。絢は柵の向こうの林の中へ入っていった。」

「お、おい待て！ この墓荒らし野郎め！」

「俺はその後を追うため手前の柵に手をかけ上ろうとする……が、うまく登れない……あいつこんな柵をどうやって登ったんだ……」

「絢の向かったほうへ、ポケットにしまっていた懐中電灯であたりを照らしながら進む。」

「おーい、絢あー！」

「しかし返答はない。ただ向こうのほうでがさがさと絢の歩く音が聞こえるだけだ。」

「しばらくうつそうと茂る林の中を進んでいくと、目の前に平坦な草地になっているところが見えた。」

「そこには絢と……そしてあの『巨大土人形』があった。」

「こ、これが……」

「くふうく、これが『巨大土人形』ですか……なんというか……圧

巻というか……感無量というか……言葉にできません……すごいです……破損もありませんし……」

しばらく俺と絢は『巨大土人形』の前で立ち尽くしていた。眼前の人形は確かに土でできた『土人形』であった。その人形は人間の形をしていて、そして鎧と兜と小手などをつけた武人の人形であった。ちょうど歴史の教科書で見た埴輪と雰囲気が似ている。きめ細かく掘られた紋様、くぼませて描かれた人形の眼、口、鼻。それらが頭の前から足の先まで細部まで施されており、とても美しく見えた。

そして特記すべきはその大きさ……全長6メートル、横幅3メートルほど。もしこの土人形が動き出してもしたら人を何人かたやすく踏み潰してしまうだろう。まるでロボットアニメのロボットのよくな大きな体躯……それがこの平地でどっしりと仰向けに寝ているそのくぼませて描かれた不気味な顔は今宵の『見えない月』を拝んでいた。

「見るからに埴輪のようですけど……大きさが大きさですからねえ……太古のロマン侮りがたしです……」

絢は感嘆しながら人形の周りを歩いていった。あたりはカエルの鳴き声しかない。

「では……さつそく調査を……」

と、突然絢は背中にしよっていたリュックから何かを取り出そうとしていた。いったい何を取り出すというのか……まさか調査つて……

「ちょ、ちよつと待て！調査つてこの土人形のか！そんなことばれたらどうなるかわかってんのか！」

すると絢はえへへと笑いながらこちらに顔を向ける。

「冗談ですよ〜武くん〜」

さすがの絢もやっていいことといけないことは分かっていたようだった……まったく……妙なことしやがって……

すると……………

ピカアアアアン

突如、巨大土人形が光りだす。

「な、なんだ！！！」

「な、なんなんですか一体！！！」

白く光っている巨大土人形を見据えながら慌てふためく俺と絢。奇怪なる現象、怪奇現象……やがてその土人形が発する光が俺と絢を包み込む……

「こ、これって……土人形のタタリですかぁ！！！」

「た、タタリだとぉ！！！」

祟りだと……そんな、ふざけるな！一体全体どうなってんだよ！俺たちが一体何をしたっていうんだよ！……いや、勝手にこんなところ来るのは悪いことだろうけど……俺はただ絢の付添いできただけなんだぞ！それに人形を荒らしたりなんか、触ったりなんかもしてないし……

光は次第に大きく、広くなっていく。あたりは真っ暗の夜なのに、光のせいで真っ白になっていく

そして俺たちの頭も、真っ白になっていく……

……ん？

ここは……どこだ……

真っ白に包まれた、真っ白な世界。前も、後ろも、右も、左も、上も、下もすべて真っ白。

なんなんだここは……体が動かない……

ただ眼前に白があるだけ。

動かせるのは眼孔だけだった。眼だけを左のほうへやってみると

そこには絢の姿があった。

「あ、絢……」か細い声でそう言った。

「……ん……ここは……」

絢は寝ぼけたような感じであたりを見回す。俺と同様に、この状況に混乱していた

少年よ

「へ？」

突然、声が聞こえた。

己の運命と、闘え

「……運命……」

俺はその時はただぼんやりとその声を聞き取ることしかできなかった。

そしてそのあと、また光が俺たちを包み込んだ……

三世紀、倭の地へ……

## ヤマタ国

「ん……んん……？」

辺りの異様な明るさに俺は目を覚ました。

明るい……夜なのにどうしてこんなに……ついさっきまで真っ暗闇の住宅街にいたはずなのに。

上を見上げると、そこには太陽が昇っていた。

そして、あたりは一面、荒れた大地であった。

「……………」

これは……夢なのだろうか……自分がいきなり空間から空間へ移動されたような、不思議な感覚に陥っている。これは随分と不思議な夢ということなのか……

「ん……くふう………」

隣で絢の『くふう』という鳴き声が聞こえた。この夢の中には絢が登場しているらしい。

隣の絢に目をやる。絢は辺りをキョロキョロと見回していた。

「どこですかここは？」絢が聞いてきた。

「どこなんだろうなあ……もしかしたら夢の中かもしれない………」

「夢の中ですか……………」

本当にここは夢の中なのだろうか……とりあえず確かめてみなくては……

「面ええええん……！」

俺の手刀の面打ちが、絢の頭に炸裂する（もちろん手加減はしている）。

「あいたツ……！」絢は頭上の面が打たれた箇所両手をかぶせうずくまる。

「な、何するですか武くん！」すごい剣幕で絢は言った。

「い、いやあ……夢かどうか確かめるためにさ、痛みを加えたら夢から覚めるんじゃないかと……………」

「それじゃあ自分の頭でやりなさいです！」

絢は仕返しにと俺の腹のあたりにぼこぼこパンチを入れている  
(全然痛くないが……)。

夢じゃなかったのか。確かに感覚的には『現実』と思うのだが……  
あまりにも突然にこんなことが起きてしまつては困惑せざるを得  
ない。

「いったい俺たちどこに連れてこられたんだ……」

「確か……私たちは『巨大土人形』が発した光に包まれて……そし  
てそのあと目が覚めた時にはここにいて……」

絢は少しの間考え込んでいた。

「武くん、これつてもしかして怪奇現象つてやつじゃないですか？  
「怪奇現象？」

「はいです。もしかしたら私たちは宇宙人にさらわれてここに運ば  
れたか……もしくは神様が何かに『神隠し』されたか……あるいは  
何かの偶然でタイムスリップしてきたとか……」

しばらく絢はいろいろなことを熱弁していた。

「絢……お前はオカルトにも興味があつたのか……」

「いやあ……こんなのちよつとしたテレビの受け売りですよ」  
様々なことを一人でべらべらとしゃべっていく絢。その話を聞き  
ながら宇宙人だとか神隠しだとかタイムスリップだとかについて考  
えてみたが……さっぱりなにも思いつかない。

辺りは本当に何も無い荒れた大地だった。こういうのも砂漠とい  
うのだろうか。草木がなく、生き物も見つかるのは遠くを飛んでる  
鳥ぐらいだった。

と、

「おーい……！」

遠くで人間の声がした。俺と絢は同時に声のするほうへ顔を向け  
た。荒れた大地の遠くのほうに、点のように小さく見える『人』が  
そこにいた。その点は徐々に大きくなり、人の形をしていき。その  
姿かたちができるぐらいに大きくなっていった。その人の、正確に

は二人の、容姿を見てみると……なんと兜と鎧をつけていた……

その兜と鎧は、戦国武将が付けるような大層なものではなく、地味な色で、あまり頑丈そうに見えない随分と貧相な兜と鎧だった。まるで小学生の学芸会で使う衣装のように見えた。その二人は鎧の下に白い薄い布の服を着ていて、そして足には何も測れていなかった。

その姿はまるで、というか見たまま、歴史の教科書に出てくる弥生時代の人の風体だった。まるで博物館にある弥生人の人形がそのまま動いたような何とも言い難い姿だった。

「おい、お前たち。いったい何者だ？」

二人のうちの一人が言った。

「おい絢……なんか歴史の教科書に出てきそうな人たちが目の前にいるのだが……」

「服装から推測して、たぶん弥生人かと思えます」

弥生人、やはりそうだったのか。しかし……なんで弥生人がここに……

本当にここはなんなんだ……

「お前たち、まさかモサク一族の者か？」

「モサク一族？」突然聞きなれない単語を耳にする。

「モサク一族って……一体何なんだよ」俺は弥生人の二人に訊いてみた。

「お前たち……モサク一族を知らないのか……？」

弥生人の二人のうちの一人が呆れたような不思議がるような口調で言った。

「まあ……とにかくここにいては危険だ。私たちと共に一度ヤマタ国に来たほうがいい」

「ヤマタ国？」また聞いたことのない単語が出てきた。絢のほうを振り向いてみると、絢も『ちんぷんかんぷんです』といった顔をしていた。絢がわからないことは必然的に俺にもわからないことになる。とにかく俺たち二人ともちんぷんかんぷんだった。

「そつだ、ヤマタ国だ」弥生人の一人が言った。

「もうすぐこの辺に輪偶久禮リンククレイが襲来してくるかもしれないからなあ」「りんぐくれい？」俺はまたしても聞いたことのない単語を耳にする。まるで歴史のテストを受けているかのようだ。

「……………」弥生人の二人は呆れた顔になる。正確にはもつと前から、俺がモサク一族とかいうのを訊いたときから呆れた顔をしていたが。

「お前たち……ホント一体何者なんだよ……………」弥生人の一人が溜息交じりに言った。

「そつちこそ何者なんですか」俺は不敵に弥生人の二人に言う。基本的に俺は部活の先輩以外の、大人の人にはずうずうしい性格である。

どつちも相手を不思議に思っている……俺たちは突然現れた弥生人に困惑し、対する弥生人は何にも知らない俺たちに困惑している……未知との遭遇つてやつか……

「……………」とにかくヤマタ国に行こう……詳しい話はそれからだ。付いてこい」

二人の弥生人はそのままの方向で二人並んで歩みだして行った。

俺と絢はその後ろ姿に顔を向ける。

「どうしますか武くん」絢が訊いてきた。

「とりあえず付いていこうか……なんだかよくわからないけど……………」俺と絢は二人の弥生人の後を追って荒れた大地を歩いて行った。

そして何時間が歩いた後……………」

前のほうを見ると、木の板の柵に囲まれた、集落のようなものが見えてきた……………」

「あ、ありゃなんなんだよ……………」

「あれがヤマタ国だ」弥生人の一人が言った。あれがヤマタ国とかいうやつか。周りは門以外すべて木の板で囲まれており、門には木製の櫓あぐらが立っていた。



スリップしてきたのかもしれない……しかし、そんなトンでもなことを信じれるわけがない……いや、信じたくなかった……

俺たちがそんなSFに巻き込まれるなんて……太古のロマンを求め絢に連れられ巨大土人形を見に行ったら、俺たちがその『太古』へタイムスリップされてしまった。ミイラ取りがミイラというか……絢についてきた俺にとっては理不尽な話である。俺たちこれからどうすればいいんだ……

「くふうくそれにしてもすごいです!!!」そんな俺をしり目に騒ぐ絢。

「タイムスリップ……しかも弥生時代……太古のロマン万歳です!!!」

なんだか絢は随分とハイテンションだった。お前……不安のふの字が頭の中に入ってるのか……と聞いてみたいものだ。こんなことになってもこんなに元気とは……いや、考古学オタクの絢にとつて太古の昔にタイムスリップするというのは、死ぬほど喜ばしいことなんだろう。考古学者が長い間研究してきた研究の答えが今ここにあるのだから。こんなに喜ぶのも無理はない。

とはいえ……仮に俺たちが弥生時代にタイムスリップしてきたと考えると、俺たちはどうすればいいのだろうか。元の時代に帰れるのだろうか。帰る方法があるのだろうか。ずっとここで暮らさなきゃいけないのだろうか……

いろんな不安が押し寄せる。いろいろなことがありすぎて処理しきれない。何もかも取り留めのないことことで頭がショートしそうだった。

しかし立ち止まってもいられない、何とかしなければ、不用心で無鉄砲なあいつの保護者として。

まあ、今はとりあえず成り行きに任せておくか……

そうこうしていると、弥生人の二人が戻ってきた。

「お前たち、実は門の兵いわく、ヒメノミコト様がお前たちのことを呼んでいるそうだ」

「ヒメノミコト？」また知らない言葉が出てきた。まるでどこか見知らぬ国へ来たみたいだ。正確には見知らぬ時代なのだが。

「ヒメノミコト……姫命ひめののみこと……倭姫命やまとひめののみこと……垂仁天皇の皇女のことじゃないんですか？」

「お前が何を言ってるかさっぱりわからないんだが……」誰か普通の人間はいないのか、ここには。

「お前たち、ヒメノミコト様のことも知らないのか……お前たちは一体どこから来たんだ……」

「ええと、奈良県の古山市出身なんですけど」俺は答えた。

「ナラケン？フルヤマ？それってどこにあるんだ？」弥生人の二人は首をかしげていた。

「武くん……弥生時代の人にそんなの伝わるわけじゃないですか」

「……そついやそうだな……」俺は少し照れながら言った。

「お前たちはホントにモサク一族の者じゃないんだな？」

モサク一族、というのは確かさっきの会話で出てきていたような気がする。モサク一族……なんか名前からして胡散臭うさんくさそうな一族だなあ……

「なあ、そのモサク一族ってどんな一族なんだ？」俺は弥生人の二人に訊いた。

「ここから北東にある洞窟に住んでる一族のことさ、俺たちはその一族と戦ってるのさ」

「戦ってる!？」

戦い、闘い、戦争、殺し合い、そんなものテレビを通してしか今まで、一生の中で見たことがなかった。そんな俺にとっては戦争とは遠い昔か、遠い向こうの国のことでしか思っていなかった。

しかしここは弥生時代、くにとくにとの争いが絶えない時代……そんな時代に俺たちは放り出されたのだと改めて思う。

「戦ってるって……どうして戦ってるんだ……？」俺は訊いた。

「さあ……何故だか知らんがあっちが攻撃してくるからなあ……こ

の国を守るため戦っているのだ」

国を守るためか……この目の前に見える国とやらを守るため命を懸ける……それは尊く、美しく、たくましいことだと思う。おそろしくこの兵たちはヤマタ国を誇りに思っていて戦っているのだろう。二人の弥生人を見てなんとなく感覚的にそう思った。

「モサク一族……よさく〜が〜きを〜きる〜」

「それは与作よやくだ！」

「くふう〜」 絢は未だに、今でもハイテンションだった。そんな俺たちのやり取りを弥生人の二人は呆然と見ていた。

「……話がいろいろと逸れたが、とにかくヒメノミコト様がお前たちを呼んでるから、今すぐ宮殿に参ったほうがいい」

「そのヒメノミコトってやつは誰なんだ？ どうして俺たちを呼んでるんだ」

「さあ……詳しいことは知らんが、とにかくヒメノミコト様のところへ行くといい」

ヒメノミコトってやつはどんな奴なんだ？ 『様』ってついてるからみんなから敬われてるのかなあ。それにしてもどうして俺たちを呼んでるんだろう。よそ者と思われる俺たちが……どうして……

「さあ、ヒメノミコト様の宮殿まで案内するから付いてこい」

弥生人の二人は門を通って歩き出した。俺たちもとりあえずそのあとを追って歩き出した。

これから何が起るのだろうか……

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4843w/>

---

クレイ = 大地の傀儡 =

2011年12月11日23時48分発行